

天国建設の順序と悪の追放

抑々此世界を天国化するに就いては、一つの根本条件がある。それは何かというと、現在大部分の人類が心中深く蔵されている悪の追放である。それに就いて不可解な事には、一般人の常識からいっても悪を不可とし、悪に触れる事を避けるのは勿論、倫理、道德等を作つて悪を戒め、教育も之を主眼としており、宗教に於いても善を勧め、悪を排斥している。其他社会何れの方面を見ても、親が子を、夫は妻を、妻は夫を、主人は部下の悪を咎め戒めている。法律も亦刑罰を以て悪を犯さぬようにしている等、之程の

努力を払っているに拘はらず、事実世界は善人より悪人の方が多く、厳密に言えば十人中九人迄が、大なり小なりの悪人で、善人は一人あるかなしかというのが現実である。

併し乍ら単に悪人といっても、それには大中小様々な種類がある。例えば一は心からの悪、即ち意識的に行う悪、二は不知不識無意識に行う悪、三は無智故の悪、四は悪を善と信じて行う悪等である。之等に就いて簡単に説明してみると斯うであろう。一は論外で説明の要はないが、二は一番多い一般的のものであり、三は民族的には野蛮人、個

人的には白痴、狂人、児童等であるから問題とはならないが、囚に至っては悪を善と信じて行ふ以上正々堂々として而も熱烈であるから、其害毒も大きい訳である。之に就いては最後に詳しくかく事として、次に善から見た悪の世界観をかいてみよう。

前記の如く現在の世界を大観すると、全く悪の世界といつてもいい程で、何よりも昔から善人が悪人に苦しめられる例は幾らでも聞くが、悪人が善人に苦しめられる話は聞いた事がない。此様に悪人には味方が多く、善人には味方が少ないので、悪人は法網を潜り、堂々世の中を横行闊歩

するに反し、善人は小さくなって戦々競々としているのが社会の姿である。此様に弱者である善人は、強者である悪人から常に虐げられ、苦しめられるので、此不合理に反抗して生れたのが彼の民主々義であるから、之も自然発生のものである。処が日本に於いては長い間の封建思想の為、弱肉強食的社会が続いて来たのであるが、幸いにも外国の力を借りて、今日の如く民主々義となったので、自然発生と言うよりも、自然の結果といった方がよからう。というように此一事だけは、珍らしくも悪に対して善が勝利を得た例である。併し外国と異って日本は今の処生温（ナマヌ

ル）い民主々義で、まだまだ色々な面に封建の滓が残っているとするのは私ばかりではあるまい。

茲で悪と文化の關係に就いてかいてみるが、抑々文化なるものの發生原理は何処にあつたかという、根本は善惡の鬭争である。それは古えの野蛮未開時代からの歴史を見れば分る通り最初強者が弱者を苦しめ、自由を奪い、掠奪殺人等恣いままに振舞う結果、弱者にあつてはそれを防止せんとして種々の防禦法を考えた。武器は固より垣を作り、備えをし、交通を便にする等、集團的にも個人的にも、凡ゆる工夫を凝らしたのであつて、此事が如何に文化

を進めるに役立ったかは言う迄もない。それから漸次進んで人智は発達し、文字の如きものも生れ、集团的契約を結ぶようになったが、今日の国際条約の嚆矢（コウシ）であろう。尚社会的には悪を制圧するに法や罰則を作り、之が条文化したものが今日の法律であろう。処が現実はその生易しい事では、人間から悪を除く事は到底出来なかつた。寧ろ人智の進むにつれて悪の手段が益々巧妙になるばかりである。というように人類は原始時代から悪の横行とそれを防止する善との闘争は絶える事なく今日に至ったのである。然しそれによって如何に人智が進み文化が発達し

たかは知る通りであつて其為の犠牲も亦少なくなかつたのは亦止むを得ないといふべく、兎に角現在迄は善惡鬭争時代が続いて来たのである。処がそれら善人の悩みを幾分でも緩和すべく、時々現はれたのが彼の宗教的偉人で、其教の建前としては物欲を制限し、諦觀思想を本位とし、従順を諭えると共に、将来に希望を有たせるべく地上天国、ミロクの世等の理想世界実現を予言したのである。又一方惡に対しては極力因果の理を説き、速かに悔い改めるべく戒めたのは勿論で、それが為幾多の苦難に遭い、血の滲むような暴圧に堪えつつ教えを弘通した業績は、涙なくしては

読まれないものがある。成程之によつて相当の効果は挙げたが、然し大勢はどうする事も出来なかつた。又反対側である無神主義者の方でも学問を作り、唯物的方法を以て悪による災害を防ごうとして努力した。其結果科学は益々進歩し、文化は予期以上の成果を挙げたのである。然るに一方思わざる障碍が生れたというのは、右の如く進歩した科学を悪の方でも利用するようになった事である。

先ず戦争を見ても判る通り、兵器は益々進歩すると共に、凡てが大規模になりつつある結果生れたのが彼の原子爆弾である。之こそ全く夢想だもしなかつた恐怖の結晶で

あるから、此発見を知った誰もは、愈々戦争終焉の時が来たと喜んだのも束の間、之を悪の方でも利用する危険が生じて来たので、不安は寧ろ増大したといってもいい。とはいふものの結局戦争不可能の時代の接近した事も確かであろう。之等を深く考えてみる時結局悪が戦争を作り、悪が戦争を終結させるという奇妙な結果となったのである。斯う見てくると、善も悪も全く深遠なる神の経綸に外ならなかった事はよく窺はれる。そうして精神文化の側にある人も、物質文化の側にある人も、心からの悪人は別とし、共に平和幸福なる理想世界を念願しているのは言う迄もない

が、只問題は果して其実現の可能性がありやという事と、ありとすれば其時期である。処がそれらに就いての何等の見通しもつかない為、人類の悩みは深くなるばかりである。そこで心ある者は怪疑の雲に閉されつつ、突当った壁を見詰めているばかりであるし、中には宗教に求める者、哲学で此謎を解こうとする者などもあるが、大部分は科学の進歩によってのみ達成するものと信じ努力しているが、之も確実な期待は得られそうもないので、行詰り状態になっている。処が現実を見れば人類は相変らず病貧争の三大災厄の中に喘ぎ苦しみ乍ら日々を送っている。処が之等一

切の根本を神示によって知り得た私は、凡ゆる文化の誤謬を是正すべく解説するのである。

前記の如く悪なるものが、人間の不幸を作るとしたら、神は何故悪を作られたかという疑問である。然し此様な不可解極まる難問題は、到底人智では窺い知る由もないから、諦めるより致し方ないとして、宗教は固より如何なる学問も、今日迄之に触れなかったのであろう。然し何といつても之が明かにならない限り、真の文明は成立される筈はないのである。そこで之から其根本義を開示してみるが、実は現在迄の世界に於いては悪の存在が必要であつた

ので、此事こそ今日迄の世界の謎でしかなかったのである。そうして悪の中で最も人間の脅威とされていたものは、何といっても生命の問題としての戦争と病気の二大災厄であろう。そこで先ず戦争からかいてみるが、戦争が多数の人命を奪い、悲惨極まるものであるのは今更言う迄もないが、此災厄から免れようとして、人間はあらん限りの智能を絞り努力を払って来た事によって、思いもつかない文化の発達促進されたのである。見よ勝った国でも負けた国でも、戦争後の目覚ましい発展振りは如何なる国でも例外はあるまい。仮に若し最初から戦争がないとしたら、

文化は今以て未開のままか、さもなくば僅かの進歩しか見られなかったであろう。そのようにして戦争と平和は糾える縄の如くにして、一步一步進んで来たのが現在迄の文化の推移である。之が又社会事情にも人間の運命にも共通している処に面白味がある。之によって之をみれば善惡の摩擦相剋こそ、実は進歩の段階である。

斯うみてくると、今日迄は惡も大きな役割をして来た訳になる。といっても惡の期間は無限ではなく限度がある。それは世界の主宰者たる主神の意図であり、哲学的に言えば絶対者とそうして宇宙意志である。即ちキリストが予言

された世界の終末であり、そうして次に来るべき時代こそ、人類待望の天国世界であり、病貧争絶無の真善美の世界、ミロクの世等名は異なるが意味は一つで、帰する処善の勝った世界である。此様な素晴らしい世界を作るとしたら、それ相応の準備が必要である。準備とは精神物質共に、右の世界を形成するに足るだけの条件の揃う事である。処が神は其順序として物質面を先にされたのである。というのは精神面の方は時を要せず、一挙に引上げられるからで、それに反し物質面の方はそう容易ではない。非常に歳月を要すると共に、其為には何よりも神の實在を無視させる事

である。之によって人間の想念は自然物質面に向く。茲に無神論が生れたのである。故に無神論こそ実は悪を作る為の必要な思想であつたのである。斯くして悪が生れ、漸次勢を得て善を苦しめ争鬭を起し、人類をして苦悩のドン底に陥らしめたので、人間は這上ろうとして足掻くのは勿論、発奮努力によって苦境から脱れようとした。それが文化発展に拍車を掛けたのであるから、悲惨ではあるが止むを得なかつたのである。

以上によって善惡に就いての根本義は大体分つたであるが、愈々茲に惡追放の時が來たので、それは善惡切替の

境目であるから、悪にとっては容易ならぬ事態となったのである。右は臆測でも希望でも推理でもない。世界経綸の神のプログラムの現はれであるから、信ずると信ぜざるとに拘はらず、右は人類の決定的運命であつて、悪の輪止りであり、悪が自由に出来た文化は、一転して善の手に歸する事となり、茲に地上天国樹立の段階に入つたのである。